

RJ-08 「住民主体による河川環境保全の取り組み－猿ヶ石川再生プロジェクトを事例として－」

課題提案者：田瀬ダム水源地域ビジョン推進協議会

研究代表者：総合政策学部 鈴木正貴

研究チーム員：辻盛生（総合政策学部）、多田勉（船渡ビオトープの会）、千葉和（NPO法人遠野エコネット）

<要 旨>

本研究は、住民自らが継続可能な河川環境調査の体制づくりと手法を試行しつつ、その過程において他地域でも活用可能な普遍的な事象の探求および効果の検証を目的とした。遠野市猿ヶ石川の河川環境の悪化を危惧する有志とともに「猿ヶ石川再生プロジェクト」を発足させ、種々の取り組みを実施した結果、計画段階における地域住民の参画が活動に対する関心の醸成に貢献していることや、プロジェクトを立ち上げることで各種団体間および個人間の連携と情報共有が促進されることが確認された。

1 研究の概要（背景・目的等）

遠野市は「永遠の日本のふるさと」をキャッチフレーズとして、日本人の心のふるさと＝原郷のイメージを大切にしたい町づくりに取り組んでいる。しかし、市内を流れる猿ヶ石川については、近年、河川が環境が悪化しているとの声が聞かれるようになった。その原因については、当河川を見守っている各種団体や個人が様々な意見を述べているが、いずれも科学的な根拠に乏しいため、抜本的な対策を図ることができない状況にある。

以上のような背景を経て、有志により地域住民が主体的に「本当に魚が減っているのかどうか」を調査することが提案・検討された。しかしながら、全国の好事例を参照すると、地域住民が実施する科学的な根拠を有した河川調査の実施・継続のノウハウは、対象地域の風土や住民性等が貢献しているケースが多い。したがって、同じような取り組みを猿ヶ石川流域で実施しても成功するかは不明である。また、岩手県内の他河川においても、類似の案件に対して、どのように活動したら良いか苦悩してしまい活動が停滞している事例が存在する。そこで、本研究では、実際にプロジェクトを立ち上げ、住民自らが継続可能な河川環境調査の体制づくりと手法について試行しつつ、その過程において他地域でも活用可能な普遍的な事象の探求および効果の検証を目的とした。

2 研究の内容（方法・経過等）

2-1 プロジェクト発足におけるコンセプト

全国の好事例の実施過程を概査すると、その過程において普遍的な事象の一つとして、「活動当初から住民が参加すること」があげられる。そこで、このプロジェクトで実施する活動内容について、当初は、住民が自ら議論する場を設けることを念頭に以下に述べる実施項目を定めた。

2-2 実施項目

実施した項目とそのねらいについて、以下にまとめる。

1) 「猿ヶ石川再生プロジェクト」発足会合&発起人打合せ

有志による談話会をプロジェクトにするためのプロジェクトの発足と問題意識の共有。

2) 川の調査手法のワークショップ開催

住民を対象にした具体的な調査手法に関する知識の共有、演習。

3) モニタリング地点選定のワークショップ開催

住民間における問題意識の共有。住民による調査地点の選定。

4) 猿ヶ石川再生セミナーの開催

今後の活動展開のために、住民が先進事例から知識を得る場の提供。

3 これまで得られた研究の成果

3-1 「猿ヶ石川再生プロジェクト」発足会合&発起人打合せ

平成26年8月22日に実施した。関係団体代表者、および個人に参集して頂き、プロジェクトの設立趣意書（案）の作成（図1）、および猿ヶ石川の抱える課題について情報共有を行った（写真1）。

3-2 川の調査手法のワークショップ開催

平成26年11月27日に実施した。猿ヶ石川愛宕橋付近を会場とし、総合政策学部の辻・鈴木の2名の教員が講師となって、水質と水生動物を対象とした調査手法について、説明および演習を行った（写真2）。

3-3 モニタリング地点選定のワークショップ開催

平成27年1月16日に実施した。大判印刷による猿ヶ石川流域の白地図を用いて、その上に付箋で意見を書き込む形式でワークショップを行った。付箋に書き込む内容は、1) 猿ヶ石川に関する良い思い出、2) 猿ヶ石川の問題、3) 調査地点にふさわしいと思う場所の順に付箋で（色分けをして）書き込みを行った。その後、作業班ごとに、話合った結果について、付箋を貼った白地図を使って説明して貰った（写真3）。

猿ヶ石川再生プロジェクト
設立趣意書（案）

目的

遠野市は「永遠の日本のふるさと」をキャッチフレーズに、日本人の心のふるさと＝原郷のイメージを大切にしたい町づくりに取り組んでいる。その背景には、穏やかな田園風景と清らかな清流が作り出す美しい農村の風景が残されていることが大きな要因と言える。雪解けが進むと、遠野郷の母なる川である猿ヶ石川には、多くの釣り人が訪れ、遠野郷の自然を堪能してきた。

しかし、近年になり、釣り人の姿も減少し、また、「川が変わってしまった」との声も聞かれるようになった。その原因については、各団体や個人で様々な憶測が語られているが、いずれも科学的な根拠に乏しく、そのために、抜本的な対策を図ることができない状況にある。

この状況を改善するためにはとても長い年月と多くの市民や関係者の理解と努力が必要となる。そこで、趣旨に賛同する方々で「猿ヶ石川再生プロジェクト」を立ち上げ、多くの生命を育む美しく豊かな「清流＝猿ヶ石川」を取り戻すための一歩を踏み出したいと考えている。

運営体制

・ 当面は発起人が中心となり、規約等をつくらず、猿ヶ石川流域の各種関係団体と連携しながら、広く市民が気軽に参加できるような運営体制を心がける。

予定している事業

・ 当面は、田瀬ダム上流側（遠野市側）にエリアを絞り、研究者や関係団体の協力を得ながらの調査、ワークショップ、セミナー等を開催する。また、調査結果を公表するとともに、その報告書を作成し行政機関に提言書としてまとめる。

平成 26 年度の活動

・ 田瀬ダム水源地域ビジョン推進協議会が申請し採択となった「岩手県立大学の地域提案型地域共同研究」（予算：約 50 万円）を活用し、鈴木正貴先生（県立大学助教）の指導を受けながら上記事業を円滑に進める

図 1 設立趣意書（案）の作成

3-4 猿ヶ石川再生セミナーの開催

平成 27 年 2 月 21 日に実施した。先進事例として、福井県嶺南地方で活動している「ハスプロジェクト推進協議会」から事務局長の関岡氏を招待し、活動内容について講演して頂いた。講演後、出席者を交えて意見交換する場を設けた（写真 4）。また、アンケートを用意し、出席者のコメントを集めた。コメントには、猿ヶ石川の現状を嘆く意見がある一方で、今後の住民活動等による河川環境の改善に期待する声や、実際に活動に参加する意思を感じる意見が寄せられた。

4 今後の具体的な展開

プロジェクト立ち上げを地域住民主体で行うといった当初の計画は概ね達成し、計画段階における地域住民の参画が、意識の醸成に貢献していることが示唆された。また、プロジェクト立ち上げの効果として、猿ヶ石川に関心を抱いている各種団体や個人の連携と情報の共有化を確認した。他方で、当初、平成 26 年度内に実施予定であった河川環境調査は、平成 27 年度から実施予定である。また、「モニタリング地点選定のワークショップ」で作成された白地図の書き込み情報や、セミナー参加者を対象にしたアンケートについて解析の余地が残されている。したがって、今後も引き続きプロジェクトの進捗に努め、その過程において、パネル調査手法等用いながら、参加者の意識の変化等について追跡調査することで、研究目的であるプロジェクト進捗過程における普遍的な事象の抽出と、その効果の検証を進めてゆく予定である。



写真 1 有志によるプロジェクト発足会



写真 2 川の調査方法のワークショップ



写真 3 調査地点選定のワークショップ



写真 4 セミナーの開催